

モンゴル国建国800年記念・専修大学文学部創設40周年記念公開シンポ

「大草原のシルクロード」

中央アジアを東西に結ぶ文明交流の道として知られる「シルクロード」の北方のモンゴル高原—アルタイ山脈からカザフ高原を結ぶ、草原の道も文明が交流し、古くから人々が移動した。その「大草原のシルクロード」をテーマとした公開シンポジウムが11月19日、生田キャンパスで開かれた(主催:専修大学・川崎市教育委員会)。

駐日モンゴル国特命全権大使であるレンツェンドー・ジグジッド氏のあいさつの後、6時間に及ぶ、第一線の研究者の講演が行われた。モンゴル国建国800年、本学文学部創設40周年という記念すべき節目の年に行われたシンポは、昨年の「シルクロード探見」に続き、300人に達する聴講者を集めた。

◆講演テーマ及び講師は次のとおり。

◇エルデネツォグト・サラントゴス氏(モンゴル大使館文化担当書記官)「モンゴルの国際関係史」

◇加藤晋平氏(モンゴル国考古研究所名誉教授)「日本・モンゴル考古学共同調査の成果」

◇金子民雄氏(西域史研究者・哲学博士)「ロシアの探検家による中央アジア・モンゴル旅行とその報告書」

◇畠山禎氏(横浜ユーラシア文化館学芸員)「紀元前の遊牧民たち」◇佐竹弘靖ネットワーク情報学部教授「中央アジアの狭間で」

◇亀井明德文学部教授「古都カラコルムに運ばれた陶磁器」

⇒関連記事【寄稿】「モンゴル・古都カラコルムの陶磁器(とうじき)調査」(「ニュース専修」12月号)



亀井教授



佐竹教授



▲「モンゴルの国際関係史」を語るサラントゴス・モンゴル大使館文化担当書記官

【寄稿】

モンゴル・古都カラコルムの陶磁器（とうじき）調査

モンゴル・カラコルム遺跡出土陶磁器（とうじき）の第一次調査がこのほどウランバートルで行われた。カラコルム遺跡出土陶磁器調査団（亀井明德文学部教授）とモンゴル国立歴史民族博物館との間で締結した共同研究である。亀井団長から寄稿をいただいた。

国立歴史民族博物館で館蔵品調査
壮大な搬送ルート解明へ

—文学部教授 亀井明德

カラコルム遺跡とは

モンゴル共和国は、今年で建国800年をむかえた。この遊牧民によって最初につくられた首都がカラコルムである。現在は、ハラホリンとよばれている。

戦乱にあげくれた闘将チンギス・カーンは、1226年に落馬事故が原因で、58歳で亡くなり、その跡を継いだのは第3子のオゴデイである。彼は1235年、首都をカラコルムに定め、東西1・2キロ、南北1・5キロの城壁で囲まれた内側に、宮殿や寺院とともに商工業をなりわいとする人々が住みついた都市をつくりあげている。

草原のなかに建設された都市であり、約150年後の1388年に明軍がここを攻め、徹底的に破壊され廃墟となった。計画された都市であり、街路が縦横に整備され、近くの河川からは水が引かれ、噴水をもつ庭園や農業も行われていた可能性がある。現在の北京に首都を移すまで、ここが大モンゴル帝国の中心として機能していた。

カラコルムは、現在の首都であるウランバートルから西へ車でおよそ6時間の距離にある。現在は、この遺跡に接してエルデネ・ゾーというラマ教寺院がある。カラコルム崩壊後150年を経過した1585年につくられており、その建築資材として、カラコルムにあったほとんど全てのものが持ちさられたようである。

古都カラコルムの調査は、1948～49年にロシア科学アカデミーのキセリヨフ教授の指揮によって発掘が行われ、城壁の西南隅の大型建物や都市遺跡の中心部を調査している。1996年には、ユネスコの事業としてわが国の考古学者が、遺跡の精密な地図を作成



▲カラコルム遺跡の全景



▲博物館での実測



▲陶磁器の破片

し、遺跡保護の対策をたてている。

これらの調査、とりわけキシリヨフの調査によって大量の陶磁器が発掘され、現在、モンゴル国立歴史民族博物館、国立考古学研究所、エルミタージュ美術館に保管されている。キシリヨフは、報告書を公刊し、その概略を知ることができる。しかし、2005年に私が陶磁器について予備的調査を実施したところ、報告書に記載されていない重要な破片があることが判明した。そこで出土陶磁器のすべてを網羅する報告書の必要性を、博物館のオチル館長と相談し、モンゴル研究者と共同研究する協定書を結び、今年9月に実現した。

9月2日、私たちのチームは、院生など3人と通訳1人で構成し、ウランバートルの中心部にある国立歴史民族博物館の一室で6日間、朝から晩まで、ひたすら図面を作成する地道な仕事を行った。

博物館が現在、保管する約240片のすべてについて写真撮影をし、そのうち重要とみる約100片について図面を作成した。9月にはいと雪が降る日もあったが、順調に仕事がすすみ、館蔵品の調査を終了できた。

どこからいつ運ばれたか

全ての破片のなかで、それらが焼かれた窯跡が明確なのは、江西省景德鎮窯の青花磁器（染付）、浙江省竜泉窯の青磁と朝鮮の高麗青磁などである。

景德鎮窯の焼きものは、元の時代から最盛期をむかえ、とりわけ青花磁器は、従来の中国の陶磁器のカラーを打ち破る画期的な発明であった。しかし、つくるのが難しかったようで、生産量が極端に少なく、中国全土からも66遺跡から出ているに過ぎない。カラコルムからは11片を検出している。竜泉窯青磁とともに、長江以南の窯から、大運河を北上して大都—上都を経由し、大草原を馬車で運ばれたと想定したい。

朝鮮半島の高麗青磁がもたらされているのも興味深い。この焼きものは中国でも珍重されていたようである。高麗は、モンゴルへの朝貢国であり、その南部にある窯から船で現在の天津まで運ばれ、さらにカラコルムにもたらされたと考える。このほか、中国北部を中心にして数カ所の窯からカラコルムへ運搬された。ペルシャ語で記されたモンゴル史である『集史』のなかに、毎日、50頭の馬車がカラコルムに必要な物資を輸送していると記されている。大量の中国・高麗の焼きものもその中に含まれていたであろう。

今回は、博物館保管の陶磁器だけを調査したが、他の研究所とエルミタージュの2カ所にも、これ以上の陶磁器が我々の調査を待っている。膨大な量であるが、じっくりと実測調査をしていると、奇妙なことに気がついた。そのひとつは、破片のなかに直径3ミリほどの孔があけられているものが、かなりの割合でみつかった。これは割れてしまった容器を鏝（かすがい）によってつないだ痕跡である。たしかに大量の陶磁器が搬入されたが、壊れたものを丁寧に修理して使用していたようである。

さらに、中国陶磁器がここに搬入されたのは、かなり限定された時期である。カラコルム自体の存続は、約150年であるが、焼きものはその中で、終わりの50年ほどに集中し、首都建設から100年近くの焼造とみられる陶磁器はみつけれない。

こうした所見は、破片を1点1点、細かく見ていくことによってはじめて出てくることである。今年度の調査報告書を日・英・蒙の3カ国語で作成する準備にはいった。

今年の8月、前総理がモンゴルを訪問し、カラコルムに博物館を建設するために資金援助の約束をした。現在、日・蒙の関係は良好であり、ますます親密になるであろう。来年度も残る2研究施設の破片を調査する計画であり、興味と志のある学生が中心になってくれるように期待している。

.....

（かめい・めいとく）文学博士。研究テーマは中国陶磁史。

⇒関連記事「[モンゴル国建国800年記念・専修大学文学部創設40周年記念公開シンポ「大草原のシルクロード」](#)（「ニュース専修」12月号）